

No.43

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2007.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 大橋康二

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸均乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/it-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



てつえ そうもんむこうづけ 鉄絵草文向付 (5)

館蔵資料

肥前・唐津焼 1590~1610年代

口 径： 6.4cm

高 さ： 10.4cm

高台径： 4.3cm

鉄絵具で種々の文様を描いた唐津焼は一般的には絵唐津と呼ばれており唐津焼の代表的な技法のひとつです。この作品も鉄絵で胴部の一方に草文を描き、他方には檜垣文を表わしています。草文はそれぞれ文様・筆致がいくらか違っているものの、5客組として伝世したものです。

ロクロで成形した後、胴から口部にかけて押さえて四方に作った向付で、特にこのような器形のものを深向付、筒向付、のぞきなどとも呼ばれ、優秀な茶陶を多く焼いた唐津において、様々な器形の向付が焼かれました。

この向付は鉄絵の筆致や四方に作った器形などから、16世紀末から17世紀初期にかけて焼かれた多久高麗谷窯の製品と考えられています。

常設特別展のお知らせ

「寄贈記念 旧高取邸を飾ったやきもの—炭鉱王のもてなしの器—」展

○趣 旨

平成18年度に寄贈を受けた高取本家のコレクションは、杵島炭鉱の創業者高取伊好(これよし)とその後継者高取九郎の収集した約500件1,500点の陶磁器です。

この高取本家の陶磁器は、明治37年(1904)唐津市城内に建てられた近代和風建築の高取邸(平成10年に国指定重要文化財に指定)の調度品や什器として集められ屋敷を飾り、茶室「松風庵」の景色となり、宴席を楽しませたものです。

○主催及び会場

佐賀県立九州陶磁文化館

第1・第2・第3展示室

○会 期 平成19年9月23日(日)~11月25日(日)

57日間(月曜日休館)

○観覧料 無 料

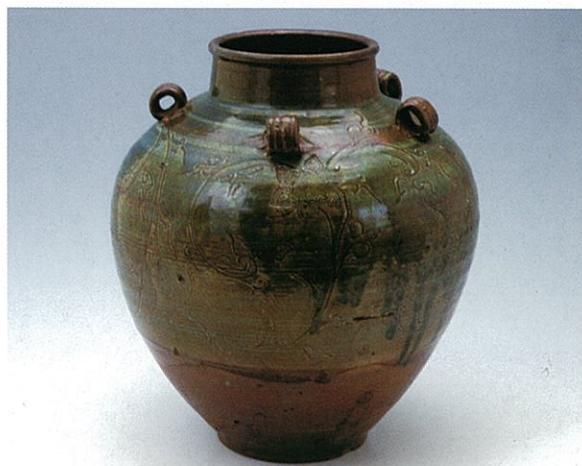
○出品点数 陶磁器 約500件

○展示内容

食器として使われた鍋島藩窯・大川内山の磁器、数に圧倒される肥前・有田窯や、茶道家であった伊好夫人愛用の中国製の煎茶器などとともに、屋敷の床の間、洋間を飾った花瓶や壺類を展示します。

○印刷物

展示品の中から精選した約200件を掲載・解説した図録を刊行します。



緑釉牡丹唐草文耳付壺
肥前・小田志窯 1650~80年代



染付花鳥人物文変形皿
肥前・有田窯 1670~90年代



青磁染付寿字桃宝尽文雲形大皿
肥前・鍋島藩窯 1690~1730年代



染付唐花唐草文三段重
肥前・龜山窯 1820~60年代

「新収蔵品展」

- 会期 平成19年6月6日(水)～6月21日(木)
- 内容 平成18年度に購入・寄贈により新たに収蔵した資料を紹介します。今回は、古唐津の灰釉皮鯨手茶碗、古伊万里の色絵仔犬置物、薩摩焼の灰釉肩衝茶入などを展示いたします。
- 展示数 40件 50点 (予定)
- 会場 第1展示室



灰釉皮鯨手茶碗
肥前・唐津 1590～1610年代

「テーマ展 高校総体記念 「ダイナミックな文様 ーはねる・はしる・とぶー」展」

- 会期 平成19年7月17日(火)～8月29日(水)
- 内容 人や動物のダイナミックな動きをあらわしたやきものを展示します。
- 展示数 50件 50点 (予定)
- 会場 第1展示室



染付鯉躍登文大皿
肥前・有田 1790～1830年代

「テーマ展 新春展「七福神と吉祥文様」

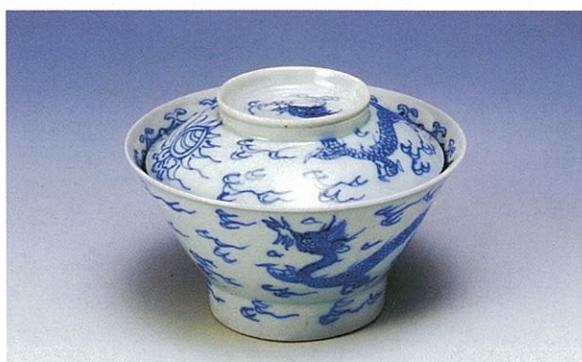
- 会期 平成19年12月20日(木)～
平成20年1月14日(月)
- 内容 新春にちなみ肥前や九州の陶磁器のなかから七福神などの縁起の良い模様や形の器を選び展示します。
- 展示数 50件 60点 (予定)
- 会場 第1展示室



色絵七福神文酒注
肥前・有田 1720～50年代

「テーマ展 「飯碗ー江戸から現代までー」展

- 会期 平成20年3月19日(水)～4月6日(日)
- 内容 肥前磁器を中心に各時代につくられた多様な飯碗を年代ごとに展示します。
- 展示数 40件 70点 (予定)
- 会場 第1展示室



染付宝珠雲龍文蓋付碗
肥前・有田 1780～1820年代

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて3 英国の肥前磁器コレクション その2 スクエアリーズ・コート(Squerryes Court)

前号ではスコットランドの貴族の館での「色絵亀乗人物置物」の発見を報告したが、今回はロンドンから一時間もあれば行く事が出来、一般公開されている館にあるのに、そこにある珍しい肥前磁器が日本はおろか、英國のOriental Ceramic Societyでも筆者の記憶する限り、取り上げられたことがないという知られざる肥前磁器コレクションを紹介しよう。

その館スクエアリーズ・コート(Squerryes Court)はロンドンの南22マイル(35キロ)、ケント(Kent)州のウェストラム(Westerham)にある。ロンドンの商人サー・ニコラス・クリスピ(Sir Nicholas Crisp)が1680年にこの領地を購入、以前からあった館を壊して新しく建てたのが現在の館である。1698年の彼の死後、この館はその息子から1700年に初代ジャージー伯爵(The First Earl of Jersey)エドワード・ヴィラーズ(Edward Villiers c.1656-1711)に売却されたが、1731年に第三代伯爵からジョン・ウォード(John Warde)がこの館を買い取って以来、今日までウォード家の子孫に受け継がれている。

エドワードは、当時の王ウィリアム三世(William III)に仕える宮内庁長官で、この館へ王の行幸を仰いでいる。ウィリアム三世はオランダ王室の出身だが、母は英國王室の出で、同じく英國王室から嫁いできた妻のメアリー(Mary)とウィリアムは従兄妹の間柄であり、英國王位継承権第三位にあった。1688年英國の名誉革命でメアリーの父のジェームズ二世(James II 1685-89)がフランスに亡命後、英國に戻り王位に就くようにとのメアリーへの要請に従って、妻と共に英國へ渡り、妻メアリーと共に治し、1694年のメアリーの死後も1702年に没するまで王位にあつた。このあとメアリーの妹のアン(Anne)が王位に就くが、デンマークの王子である夫との間の息子は夭折し、1714年アンの死によって王位はまたいとこにあたるドイツのハノーヴァー(Hanover)家のジョージ(George 在位1714-27)が継ぐこととなる。

ヴィラーズ家は祖父の代から英國王室との関係深い要職にあり、エドワードはオランダ大使を務め伯爵となった後フランス大使となり、國務長官(1699-1700)としてイングランド、ウェールズ、アイルランド、アメリカ植民地、南ヨーロッパ諸国を担当し、三度英國控訴院の裁判官に任命され、ウィリアム三世、アン女王の宮内庁長官も務めるが、1704年にアン女王によって解任され、その後はアン女王の亡命した父ジェームズ二世の庶子を王位につける運動に加担し、1711年に死去した。

エドワードの母、フランセス・ハワード(Frances Howard)は王女時代のメアリーとアンの教育係を務め、その宮廷での自分の子供達の地位を確保した。エドワードの姉妹のアン(Anne)とキャサリン

たなかしげこ
田中恵子

- 日本アジア協会理事
- 東洋陶磁学会（日本）会員
- The Oriental Ceramic Society(London)会員

(Katherine)は1677年にメアリー王女がウィリアムと結婚しハーグに赴く時に花嫁随伴役となり、エリザベス(Elizabeth, 1657-1733)は1680年にウィリアム三世の公認の愛妾となる。1694年メアリーの死に際してウィリアム三世はエリザベスとの長年の関係を断ち、1695年エリザベスはいとこのジョージ・ハミルトン卿(Lord George Hamilton)と結婚、ジョージは翌年オークニー伯爵(Earl of Orkney)に叙せられ、オーカニー伯爵夫人となったエリザベスは、アン女王没後のハノーヴァー朝でもその社交界での影響力を持ち続け、ジョージ一世、二世の行幸の栄に浴した。

このようにウィリアムとメアリーに家族ぐるみで密接な関係を持っていたエドワードは、その当時オランダ東インド会社が運んでくる東洋陶磁で室内を飾るという王室から始まった流行に無関心でいたとは到底思われず、その社会的地位から上質な品を誰よりも先に見る機会があったことと思われ、1700年にスクエアリーズ・コートを買い取って王の行幸を仰いだ際には、館に高級な輸出東洋陶磁が並んでいたに違いない。



1. 色絵岩牡丹文八角大壺・瓶 有田 1690~1710年代
中央の壺H.86cm(蓋まで)



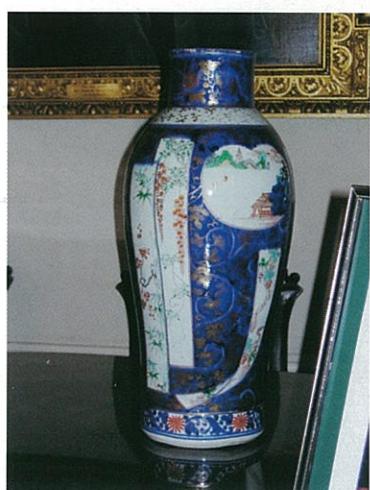
4. 色絵芙蓉魚藻文鉢 有田 1690~1730年代
D.37cm

1731年に第三代伯爵からこの館はジョン・ウォードに売却された。その大伯父でヨークシャー(Yorkshire)出身のペイシエンス・ウォード(Patience Warde)は絹・毛織物で財をなし、1680年にロンドン市長となり、その事業を引き継いだ甥のサー・ジョン・ウォード(Sir John Warde)もロンドン市長、イングランド銀行総裁を務め、その息子がスクエアリー・コートを買ったジョン・ウォードである。1746年にこの館を相続したその息子のジョン・ウォードは美術品の収集家で、ヨーロッパ大陸へのグランド・ツアには行かなかったものの、25年の間に93枚の絵画を購入し、それらは今もこの館に飾られている。現在この館に上質な肥前磁器が残されているのは、歴代の当主がこのような歴史的、社会的背景から、良いものを先に選ぶ機会に恵まれていたからと考えてもよさそうであるが、いつこの家に入ったものかは残念ながら陶磁器に関してはなにも記録がない。ヨーロッパの絵画、家具は作家名がわかるものが多いので、記録が残し易いといえるかもしれないし、また、バーリー・ハウス(Burghley House)の所蔵目録は別として、あるいは陶磁器が美術品として記録を残すような扱われ方をされてこなかったのではとも思われる。というのは、最近英国の知人の家で相続が発生した時に、その古い館の壁一面の陳列棚を埋める清朝の染付の皿のコレクションは、壁に付随するものとして館を相続する長男のものとの主張が通り、相続人で分ける対象にならなかつたとのことである。

この館の公開されている部屋に置かれている東洋陶



2. 染付鳳凰文八角大壺
有田 1690~1710年代 H.69cm(蓋まで)

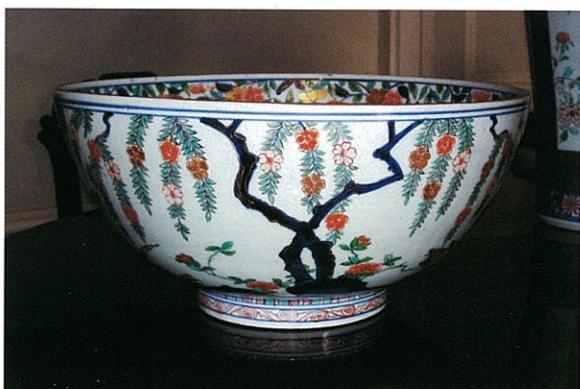


3. 色絵短冊窓絵山水文瓶
有田 1690~1730年代 H.48cm



7. 色絵鳳凰窓絵草花文大壺
有田 1710~1740年代 H.59cm(蓋まで)

磁の特色は、1690年から1740年代の高級輸出用色絵肥前磁器が多いこと、それも他の館では壁にかけられている例が多い大皿や飾棚に収められた小皿や小物がなく、他の館によくある清朝の染付や色絵も少ないとことである。ひときわ目を引くのは、英國では他に類を見ない丈の高い色絵の筒形広口瓶2、八角蓋付壺1の3点セットである(写真1)。また英國では揃っていることが珍しい染付の筒形広口瓶2と蓋付壺3の5点セット、そして筒形広口瓶2本を伴ってはいないが上絵具の色数多く文様が丁寧に描かれた色絵蓋付壺の3点セットや、径37cmの色絵の大鉢7個などがある(写真4~6)。



5. 色絵枝垂桜文鉢
有田 1690~1730年代 D.37cm



6. 色絵花鳥文鉢
有田 1690~1730年代 D.37cm



8. 色絵菊文双耳鉢
有田 1710~1740年代 H.20cm(蓋まで)

平成18年度企画展の報告

特別企画展「将军家の献上 鍋島 -日本磁器の最高峰-」

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館 第1・第2・
第3展示室
○会 期 平成18年9月30日(土)~11月12日(日)
44日間(会期中無休)
○出品点数 234件260点 重要文化財5件(5点)を
含む

○展示内容

本展覧会では、鍋島焼は将军家献上を主目的としたため、幕藩体制の絶対権力者徳川将軍家の動きに敏感に反応して変遷を遂げたという新たな視点で藩窯の歴史をたどるというものでした。

展示構成は、第1章 草創期～家光と鍋島焼の草創から、第2章 成長期～藩窯の移転と生産体制の確立、第3章 隆盛期～綱吉と元禄・鍋島様式の完成、第4章 成熟期～吉宗と鍋島焼の成熟、第5章 衰退期～「家好み」の新鍋島様式の5コーナーに分けて展示紹介しました。

関連行事として、記念講演会(講師：出光美術館学芸員 荒川正明氏及び当館館長 大橋康二)を11月4日

(日)に、記念茶会を10月14日(土)に、学芸員による展示解説を10月14日(土)、10月28日(土)に開催しました。

「鍋島」の美しくかつ斬新で高度に洗練されたデザインはまさに“日本磁器の最高峰”の名にふさわしく、今回の展覧会では、多くの方々にその最高峰の美を楽しんでいただきました。



展示解説の様子



展示状況



展示状況

第103回九州山口陶磁展

○会 期 平成18年4月29日(土)~5月10日(水)
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第103回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の植木薰氏の「うねり」を始め、101点の入賞・入選作品が展示されました。



展示状況

寄贈記念 松本佩山展 -川口コレクション-

○会期 平成18年8月1日(火)～8月20日(日)

有田町の川口英夫氏から平成17年度に寄贈を受けた松本佩山等の作品36件41点を展示紹介しました。

初代松本佩山(明治28年有田町生れ)は、高温度で焼き上げる本窯釉彩の技法を確立し、独創的な創作活動をした陶芸作家の草分けでした。今回の展覧会では、初代松本佩山の作品20件24点と二代松本佩山の作品など12件12点の作品を展示しました。



展示状況

小野琥山・小野珀子回顧展

○会期 平成18年9月16日(土)～9月24日(日)

釉裏金彩の技法で佐賀県重要無形文化財に選定された小野珀子と琥山製陶所(嬉野市)を作ったその父小野琥山の作品を展示紹介する展覧会が開催されました。

本展覧会は、琥山没後35年、珀子没後10年を迎える小野琥山・小野珀子父娘の作陶の歴史をたどる回顧展で、琥山の作品50点、珀子の作品55点が展示されました。



展示状況

第3回陶芸教室OB展

○会期 平成18年12月12日(火)～12月17日(日)

当館の陶芸教室の受講生OBの方々が制作した作品を展示しました。

平成11年、14年に次いで第3回目で、今回は第27期から第48期までのOB24名の制作した壺、茶碗、皿、陶板、鈴、笛など216点が展示されました。



展示状況

新春展 福をよぶやきもの展

○会期 平成18年12月22日(金)

～平成19年1月14日(日)

新春らしい縁起のよい「福茶」にちなんで、煎茶と福茶にまつわる陶磁器や関連資料、「書初」にちなんだ磁器製の文房具、また「器で遊ぶ新春の宴」と称して、祝い膳に供せられる吉祥文様の描かれた陶磁器などを、館蔵資料を中心に56件78点を展示紹介しました。



展示状況

シリーズ

やきものの技法(38)

仁清手

色絵において黒い輪郭線を伴わない絵付で、京焼風の描き方がなされたものを仁清手と呼んでいます。京焼における色絵の創始者とされる野々村仁清にちなむ技法名です。

有田の色絵技法は中国からの技術導入で始まり、中国の色絵磁器を手本としたため、基本的には黒い輪郭線で文様を描き、その中に緑や黄色などの上絵具を塗り込めて彩ります。赤い花などの文様を描くときは、赤の輪郭線に赤絵具のダミ(面塗り)が施されます。また赤の輪郭線内に緑や黄色を塗った描き方は、1640年代から60年代にかけて一時期さかんに行われましたが、鍋島が採用すると、有田民窯から消えます。

仁清手のように縁取りのない色面だけの表現は、17世紀半ばの京焼において始められ、仁清や清水焼の色絵の基本的な描き方として京焼の特徴となっています。黒の縁取りがないことの他に、金による輪郭線も京焼にはよく見られます。こうした描き方が有田の色絵に影響を与えたと考えられ、1655~60年代前半には仁清手の有田磁器が現れます。白磁素地に金銀赤の絵付けがなされたものが流行する時期と重なっています。

写真の瓢形瓶は、白磁の素地に上絵具で桜樹文と七宝文等が描かれています。桜樹の枝は紫色、葉は緑、花は赤や紫、青、金で彩られています。それぞれ輪郭線はなく、文様間にわずかな余白がとられ、これが輪郭の役割を担っています。黒い輪郭線と異なり、淡い優美な色使いとなり、京の雅が感じられます。

京焼の色絵との違いは、素地が陶器質である京焼に対し、肥前の仁清手は白い磁器質の素地です。貫入の入った淡黄色の素地と白磁素地では上絵具の見え方が異なり、京焼の方は落ち着いた色調となり、有田焼の方は明るい色調となります。

有田における仁清手は色絵の主流ではなく、特殊な一群です。17世紀後半に比較的多く、皿、碗、瓶、香炉など各種のものがありますが、共通して上品なものが多くみられます。

(鈴田由紀夫)



色絵桜花文瓢形瓶
肥前・有田 1655~70年代

シリーズ

やきものにみる文様(38)

富士山文様

富士山は言うまでもなく、日本一高い山。神々しい富士山は古くから信仰の対象であるとともに、和歌や物語にも多く登場し、絵画にもよく描かれています。また江戸時代には陶磁や染織、漆器などの工芸品でも富士山の意匠が多く用いられ、肥前磁器においても富士山文が多く描かれています。

富士山の絵は『伊勢物語』などの絵巻・絵伝の一部に描かれており、名所絵の一つとして三保の松原が描かれるようになったのがそのはじめと言われています。室町時代には富士山信仰と結びついた「富士参詣曼荼羅図」が盛んに描かれ、水墨画でも多くの富士が制作されました。江戸時代においても富士山は絵画の主要なモチーフで、室町時代の富士山が、白く雪をかぶり、頂上を三峰に描くことが定型でしたが、近世になると、狩野永徳や探幽に見られるように実景の熟視と富士から連想される自身のイメージを重ね合わせた個性的な富士が出現します。さらに江戸中期になると写生に基づく富士図が多く描かれるようになり、また浮世絵にもしばしば登場し、富士はより身近な山になって行きました。

肥前磁器において富士山文は、寛文期の前後頃から多く見ることができます。基本的には室町時代からの定型化された三峰型の富士山が多いのですが、中には「薄瑠璃釉色絵富士山文四足角皿」(柴田夫妻コレクション2-137)のように山裾を広くとり、実景に近い富士山を描いた例もあります。写真の「染付富士山文小皿」もほぼ左右対象の三峰型の富士山を描き、雲がたなびき、右下に寺院風の建物、下には簡略化された松原と網干を描いています。寺院は清見寺、松原は三保の松原を描いたものだと言われています。ほかにも皿の見込みに扇面や色紙などを描き、その中に富士山を配したものなど色々な形で描かれています。また文様だけでなく、三峰型の富士山をそのまま皿の器形にしたものも数多く作られていることも肥前磁器の特徴と言えるでしょう。

(宇治 章)



染付富士山文小皿
肥前・有田 1650~70年代